

巻頭言

大発見の源はわれわれの身の回りにある

2015年のノーベル生理学・医学賞は、北里大学特別栄誉教授の大村智先生に授与された。日本人の受賞は、生理学・医学賞では免疫学の利根川進先生、iPS細胞の山中伸弥先生に続いて3人目であった。1974年に大村先生らは、静岡県伊東市川奈のゴルフ場で採取した土壌中の放線菌の一種 (*Streptomyces avermitilis*) から「アベルメクチン」を発見し、それを基に「イベルメクチン」を開発して、10億人ものオンコセルカ症の患者を救った。白い杭 (OB杭) や砂場 (バンカーともいう) と仲が良すぎて早々にゴルフが嫌いになった筆者も、球の行先ではなく掘り起こした土や砂に目を向けていたら、少しでも世間の役に立つ発見ができたかもしれないと後悔?している。

東京農工大学特別栄誉教授の遠藤章先生は、1973年に青カビの一種 (*Penicillium citrinum*) から HMG-CoA 還元酵素阻害薬「コンパクチン」を発見し、これを基に「スタチン」が開発された。「スタチン」は冠動脈疾患と脳血管障害の原因となる高コレステロール血症の特効薬として多くの患者を救い、なかでも、「アトルバスタチン」は長らく世界の医薬品売上第一位を占めていた。その功績により、遠藤先生は毎年のようにノーベル生理学・医学賞の有力候補に挙げられている。さらに、1970年にスイスのサンド・ファーマ社の研究者により、ノルウェーの土壌中の真菌 (*Tolypocladium inflatum*) から発見された「シクロスポリン」と、藤沢薬品工業の研究者により、1984年に筑波山麓の土壌中の細菌 (*Streptomyces tsukubaensis*) から発見された「タクロリムス」は、臓器移植時の拒絶反応の抑制を可能にし、移植後の生着・生存率を飛躍的に向上させた。これらのいずれもが身近に存在する菌類から発見されたという事実は、日頃われわれが目の敵にしている微生物は、実は人類の最強の味方でもあることと、「奇跡の大発見」「世紀の大発見」の源は、われわれの身の回りであることを教えてくれる。

さて、広島国際大学看護学ジャーナルの第13巻を刊行することになった、ご投稿いただいた先生方と査読の労をお取りいただいた先生方に深謝するとともに、第14巻にはさらに多くの先生方から論文をお寄せいただくことに期待したい。

2016年3月

広島国際大学 看護学部長

看護学部学術誌 編集委員長 島谷 智彦